

徳間文庫

幻の騎馬王朝

邦光史郎



徳間書店

徳間文庫



まぼろし きばおうちよう
幻の騎馬王朝

© 1983 Shirô Kurimitsu Printed in Japan

114-7

1983年11月15日 初刷

著者 邦光史郎

発行者 荒井 修

東京都港区新橋四一〇七一〇五
発行所 株式会社徳間書店

電話(〇三)四三三・六二三一(大代)
振替 東京四一四四三九二番

印刷 凸版印刷株式会社
製本

〈編集担当 芦沢孝作〉

ISBN4-19-567548-0 (乱丁、落丁本はお取りかえいたします)

徳間文庫

幻の騎馬王朝

邦光史郎

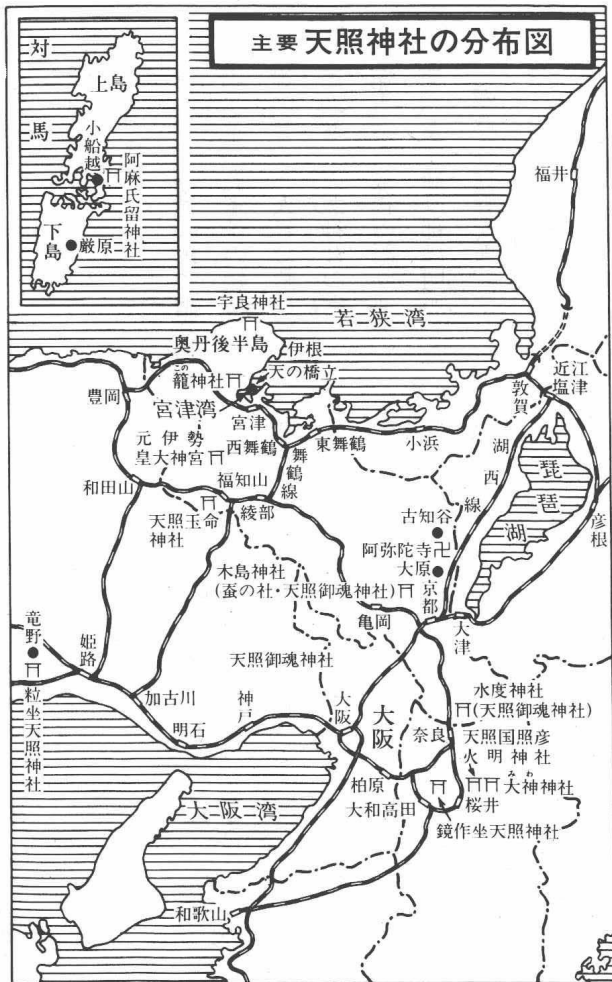


徳間書店

目次

第一章	浦島太郎の贈り物	5
第二章	孔雀館の妖精たち	60
第三章	三人目の語り部	116
第四章	天照神社の謎 あまてる なぞ	172
第五章	最後の語り部	230
第六章	語り部は明かした	277
解説	武蔵野次郎	346

主要天照神社の分布図



第一章 浦島太郎の贈り物

1

あまの橋立を出発して、およそ四、五十分ぐらい丹後半島一周道路を走って行くと、鰺漁で知られた伊根を通して、ようやく目的地の本庄浜へやってきた。

伊根で海の眺めと別れて以来、五、六キロほど山中の峠道のような所を走ってきたため、こんな山の中に浦島神社があるなんておかしいことだという気分が強かった。

けれどそれは丹後半島一周道路という近代的な舗装路のコースが道をつけやすい山の中を走っているというだけのこと、本庄浜は、海水浴客のための民宿があるような、本当は海浜の漁村だった。

だから車でやってきた神原東洋と長谷川昇の二人は、いわばいきなり村落の横手から割り込んできたようなもので、本来この村落は海に面して形づくられていたのである。

正確にいうと宇良神社、通称浦島神社は、舗装路から眺めると、小学校のちょうど裏手に当たっていて、こんもりとした林の中に鎮座していた。

そこは、大きなひとで、が山ぎわの海浜に貼りついたような形でひろがった小盆地風の田園で、だからこそ一層海から遠いように思われたのかもしれない。

本庄浜という地名と宇良神社という名称が結びついて、もっと海に近い場所を想像していた神原は、レンタカーを運転する長谷川が、

「あれですよ！ さっき聞いた時、小学校の裏手だっていってましたから、あれに間違いありませんよ」

と、鬼の首でもとったように勇んでいるのが、やや不満だった。

しかし駐在所の横を曲がって、その小さな林の方へ近づいて行くと、林の間に入母屋式の小ぢんまりとした社殿がみえてきた。

もし小学校の校庭で放課後のひとときをすごしている子供たちの笑い声が聞こえてこなかったなら、ここは無人の里かと思ったことだろう。

天地静寂、そこは天と地に挟まれた緑のエアポケットのようなものだった。

その静けさに割り込んで車を走らせることが冒瀆ぼうとくのように思えてならない。そこで稲田に挟まれた細道から鳥居前に走り込むと、早々に車を降りることにした。

しつとりと水分を含んだこまかい粒子の砂地がつづいて、ここがかつて海辺であったことを偲おもはせる。

浦島太郎の伝説は、およそ日本人なら誰でも知っているが、さて浦島太郎がどこに住んでいたかとなると、これはちょっと分かりにくい。けれども現在残っている伝承地は、この丹後半島本庄浜つつかわ（昔は筒川つつかわといっていた）と、もう一つは木曾川の寢覚ねぞめの床どこということになっている。

しかし、木曾路の人には悪いけれど、どうも木曾山中に漁師がいて、あの木曾川で大亀を救ったというのは、どうもうなずけない。そこで、これは寢覚の床という名勝をより引き立てるために、浦島伝説を引っ張ってきたのだらうと思われる。

その点、本庄浜のほうは、八世紀の頃に編まれた風土記という古い書物の丹後の国の逸文（付記）に、ちゃんと「浦島子」の居住地として出てくる。

その他、日本最古の歴史書といわれている日本書紀にも、雄略天皇の二十二年七月の項目に記載されていて、ずいぶん古い伝説であることが分かる。

だから、その浦島を祀った宇良神社の方も淳和天皇の天長二年（八二五）の創建と伝えられ、九二七年に完成した延喜式の神名帳にもちゃんと記録されている。

こういう延喜式に載っている、つまり平安朝以前からあった古い神社を、式内社と呼んでいて、大変格式が高い。といっても、あまり古すぎて今では誰を祀っているのかさっぱり分からないような、半ば朽ち果てた祠もあれば、他の神社に合祀されてしまった所もあって、いわば忘れられた存在である。

神原東洋は、鳥居わきの狛犬をしげしげと眺めたり、入母屋式の拝殿の屋根に視線を遊ばせたりしながら、すこしずつ社殿に近づいていった。

まだ若い編集者である長谷川は、東京からはるばるやってきたので、何かはつきりした記念をと力んでいるのだらう、カメラを構えて、しきりにパチパチやっていた。

神社の左手に小さな池があつて、その向こうに神主の住居らしい建物が見えているけれど、どうも人の気配が感じられなかった。

「ねえ先生、ここには重文じゅうぶんの指定を受けた浦島明神縁起えんぎって絵巻物と、乙姫おとひめの着物と称している
桃山時代の小袖があるそうで、一つ見せてもらいましょうか」

気の早い男で、名刺を片手に、もう神主の住居の方へすっ飛んでいった。

神原は、百円玉を賽銭箱さいせんにチャリンと投げ込んで、ポンと柏手かしわでを打った。

何事のおわしますかは知らねども、かたじけなさに涙こぼるる、という歌があるほどで、昔の人は神社の前を通るとかならず神に挨拶をしていた。

ところが、現代では日本の神に疑問をもつ人が多くなって、日本神道は、単なる祖先崇拜であり巨石や巨木を神とたたえる精霊観による原始宗教にすぎないという意見が強くなってきた。そのため今では神社の前を通るたびに頭を下げて行くような奇特な人は、よほどのお年寄りか一部の信仰家ということになってしまった。

まして社前に頭を垂れ鈴を鳴らして、柏手を打つなんて人は、めったに見られない。

だから神原は、それがたとえ空白な神殿にすぎなくても、ちゃんと拝んで行くことにしていた。

つまり何事のおわしますかは知らねども、であり、二千年近く日本人が信仰してきた神社なのだから、その虚ろな小空間に、投げかけられた人々の願いがいつしかたまりたまって、何らかの力と化しているかもしれないのである。

霊的な存在、または霊的な力を、全く否定しようとしまいと、この宇宙には不可思議な現象や不可知なものが無数に存在する。

薄暗い拝殿の前に佇たずんで内部をのぞき込んでみると、正面の壁間には亀の甲羅でつくった額が掲げられていた。

——一体、現代人にとって、神社とは何なのだろう。

かつて、村落共同体にとって、神はその中心的存在で、農村にあっては収穫を、漁村にあっては航海の安全とゆたかな海の幸を祈るためにどうしても必要な超自然的存在であった。

さらに産土うぶすなの神といって、その地に生まれ育った者たちの生命と健康と幸運を守ってくれる神もあれば、菅原道真を祭神とする天神信仰のような怨霊おんりょう封じの神があったり、疫病えきびょうを祓はらってくれる神もある。

けれど、現代人にとって、神はもはやさして必要のない存在となった。

だから結婚式や成人式、あるいは七五三のお祝いごとや棟上げ式、またはお祭りなどといった行事や儀式の司会者司祭者としての神主がいればよいことになって、人間のつくった神鏡を真面目に拝もうという人はまことに珍しくなっている。

——神々の時代は去った……。

生産の様式と生活の方式がすっかり変わってしまった現代において、日本の神はすでにその影響力を失ってしまった。

けれど朽ち果てて名前も分からなくなったものとはともかく、まだなんとか神殿が残っていると、やはりそれを守ろうとするのが氏子うぢこの人情というもので、神社の興廃はやはり氏子次第ということになる。まして、無住の神社とちがって、この宇良神社は珍しく神主が守っているようだ。

しかし宝物の拝観を願いにいった長谷川は、手を振りつつ引返してきた。

「誰もいませんよ。呑気のんきなもので、表も裏も開けっ放しのままなんです」

「そうかい、じゃ浦辺うらべキミさんの所はきけなかったんだね」

「ええ、どこかその辺で生きてきますよ」

だが、その辺というのが問題で、このあたりではいわゆるお隣りさんというのが、何百メートルも離れた所なのである。

「長谷川君、たしか宇良神社の南裏となつてたね、浦辺さんの住所は……」

神原はいつも手放したことのない取材メモ帳を開いてみた。

「南裏ってエト、ああ、あれですよ、ほら……」

背伸びして長谷川が指さしたあたりを見ると、なるほど神社を囲む林のはずれに、ぽつんと置き忘れられたような萱ぶき屋根の農家がみえていた。

「よし、とにかく行ってみよう。もし違つたつてあの家で教えてもらえないか……」

車に戻ってみると、外にいるほうがずっとすがすがしいにもかかわらず、仮の宿に帰ってきたようで、ある種の安らぎが感じられた。

「でもなんですね、現代に残る語り部を訪ねるなんて企画は、よそじゃまアやらんでしょね」

「そうだね、しかし一步誤ると、ゲテものに終わる惧れがある。元来、語り部つてものは、文字のない頃の一種の記録係、それも口づてに部族の歴史や古い記録を語り継いできたんだから、そんな古代の語り部が、今まで残つていようはずがないんだよ」

「でも、ロマンがありますよ、現代に受け継がれた語り部はいずこになつてのは……」

「まア仕掛け人が喜んでりゃ世話はないが、なんだつてね、この企画のきっかけは、投書からだつてね」

「そうなんです。東京の蒼井さんつて読者から、今に残る語り部を探し出してほしい。自分もこん

な人が現代に残っていることを知って感激したからといって、これから行く丹後の浦辺さん、若狭の佐竹さん、淡路島の安さんなんて人の名前を挙げてきましてね。でも、よくしらべたもんですね。問い合わせしてみると、ちゃんとそういう人がいたんですから……。驚きましたよ、いやもう全く……」

「あるもんだな、現代の奇蹟みたいなことが……」

彼らは、静まり返った野道を行く騒がしい闖入者のようなものだった。

鳥が何事だろうか様子をつかがいに近くの梢にひらりと舞い下りてきた。

農家には独特の匂いがしみ込んでいる。それは萱ぶきの屋根がたっぷり水分を吸い込んで、いわば室のようにさまざまなバクテリアを育てているためかもしれない。たしかに日本の農家は、都会の現代的住居にくらべると、湿っぽくて、カビくさい。

その家は、行きどまりになった小径の向こうに建てられていて、砂土まじりの白っぽい道が、重く垂れ下がった屋根の下に設けられた戸口へと通じていた。

上半分が障子になった板戸はよく磨き込まれているとみえて、艶々と光っている。そしてその左側に戸袋があつて、縁側にくり出す雨戸がしまい込まれている。

今、その縁側はうす暗い岩かげのような空間を構成していて、内側の障子戸が覗き見をさえぎっていた。

静かな洞窟のように、その家は暗黒をはらんでいる。

眉をしかめつつ、そっと表戸の内側に隠し込まれている土間をのぞき込んでいた神原は、眉を上げて薄れた表札の文字を判読しようとした。

「出征兵士の家、浦辺久夫としてあるね……」

「でもこの辺には浦辺姓が多いって聞きましたよ」

「つまり先祖代々ここに住んでいる人ばかりだから、表札なんていらなんだろうね……」

そこで、訪いを入れることにした。

「ごめん……」

神原は、武者修行の武芸者が、頼もうとやってきたような野太い声だが、長谷川の方は、いかにも若々しく、声も甘味を帯びていた。

「ごめんください……」

ごめんとごめんくださいが、掛け合いつつ、次第に厚かましくなつて、土間へ入って行くと、神原が、何事か異常を感じたとみえて、無造作に進もうとする長谷川を手で制した。

広い土間の左手が上がりがまちになつていて、右手にかつて牛小屋に使っていたらしい物置場と、剝き出しのまま土間の片隅に据えつけられた五右衛門風呂がみえていた。

土間は土を築き固めたもので多少でこぼこしている。そして雨の日には濡れ光り、晴天の日にもいくぶん湿った感じが残っている。

入口を入つてすぐとつつきに六畳ぐらいの座敷があつて、その隣りは囲炉裏のある板の間になつていた。

よく磨き込まれてぴかっと黒光りしている板の間から土間へ下りた所にカマドが築かれていて、大きな鉄鍋がかかっていた。近寄つて覗き込んでみると、まだほのかに温かみを感じられた。

長谷川は、神原の後からついてきて、仔細ありげにちよつと蓋をつまみ上げている。けれど、一

向に誰も出てくるようすがなく、耳を澄ましても聞こえてくるものは、^{かけひ} 笕の水音くらいだった。

「別に誰もいそうにありませんね」

ぐるっとあたりを見回して、長谷川は、どうも神原の制止が不服だったらしい。

「あれはなんだろう……」

神原は気味悪そうに、笕の水を貯めておく水甕^{みづがめ}を指さした。どこにでもよくある赤っぽい色をした大甕で、水があふれこぼれていた。

「あれがどうかしたんですか……」

「あの柄杓^{ひしやく}だよ」

「そういうと、底の方から突っ立っていますね」

アルミ製の柄杓の金属部分が、鈍い光を放っていた。

「あれが逆ならともかく柄^えの部分は木製で軽くてきているはずだろう」

だから柄杓の金属部分が水中に沈んで柄の方が浮いているのならともかく、これは全く逆だった。「水の中に立てるようにしてあるんでしょか」

「まさか……。ふつうなら上の簀子板^{すいこいた}に置いておくだろうね……」

ところがさらに近寄ってみると、なんと柄杓の柄をしっかりと握りしめた人間の拳^{こぶし}が水中にひそんでいたのである。

とも知らず、長谷川は水甕に向けてしきりにカメラのシャッターを切っていた。

だが、水中に人間の拳と柄杓の柄だけがあるなんて奇妙なことのあらうはずがなく、拳の先に、腕^{うで}があつて、人間の顔があつた。

すっかり逆立ってしまったゴマ塩まじりの頭髮がゆらゆらと水藻のように揺れなびいて、水中に沈んだ老婆のからだは水甕の中でU字型になっていた。

この土間へ入ってすぐ、によつきりと水甕の中に突っ立っている柄杓に気がついて、これは只事じゃないと神原が察したとおりだった。

屋内で水死というとおかしく聞こえるが、こうして見た限りにおいてこれは水死としか言いようのないものだった。

こんなふうには死者をみつけないかと思いがけなかったのも、神原も顔面を硬張^{こわば}らせている。

——なんだ、だらしのない……。

叱ってみても、とてもそんなことぐらいで収まりそうになかった。悪寒がたえず背筋を走り、俗にいう^{こうがん}寒丸がちぢみ上がった状態で、声すら出なくなっていた。

そこで、カメラをパチパチやっている長谷川を制することもできないうちに、長谷川が水甕の中を、ファインダー越しに覗き込んだ。

驚いたはずみにもうシャッターを切っていたけれど、レンズを通してでなく肉眼でまぎまぎと水中に浮かんでいる頭髮や、すっかり髪が薄くなって、でこぼこした地肌のみえている死者の頭頂を眺めているうちに、長谷川は突如として恐怖心に駆られたのだろう、何か訳の分からないことを口走って、一目散に土間から逃げ出していった。

それは動物的な恐怖というべきだったろう。人間が本能的な恐怖や怒りや欲情に駆られた時、理性や教養などといった歯止めは、それほど役立ちそうにない。むろん個人差はあるだろうけれど、人は本能的に死を恐れ、死者に近づくまいとする。死が怪奇なすがたで、生者に襲いかかってくる

と感じた時、人は恐怖心のとりことなって、理性を失いやすい。

けれど取り乱した長谷川を囓^かうことはできない。神原だって、今にもあの老婆が水中から飛び出してきやしないかと、びくびくしながら、やっと戸口にたどり着いた。

長谷川はもう車に乗っていた。そして神原の姿をみつけるなり、さっそくエンジンをふかせはじめた。

どちらも黙りこくったまま、車が彼らを宇良神社の方へ運んでいった。

抜けるように青い空とみずみずしい緑にみちた田園風景、それがこの世の真実の姿なのか、それとも彼らの心に貼りついて離れないあの死者の忌^いまわしい姿がこの世の現実なのか、今ではよく分からなくなってきた。

「たしか舗装路へ出るあたりに交番があつたね」

「ええ。入口の所がありましたね」

「とにかく届けなきゃいかん。このまま黙って帰るわけにはいかんだろう……」

しかしそれにしても、とても自分の声とは思えない、ぎくしゃくとした声音になっていた。

「でも、あれが浦辺キミさんでしょうかね……」

「さア分らん、多分そうだとは思うがね……」

彼らは、まだ幻想と現実の間をさまよっているような気分だった。